佳作

感謝の気持ちを音楽にのせて

山形県川西町立川西中学校
１年　木村　日向子

中学校生活が始まって、約半年が経ちました。私は、新しい友達がたくさんでき、毎日楽しく学校に通っています。中でも一番楽しいのは、部活動の時間です。私は吹奏楽部でクラリネットを吹いています。友達も先輩も優しくて、とても充実した活動ができています。しかし、そんな幸せが、いつ変わってしまうかは誰にも分かりません。

夏休み中の８月３日のことでした。その日は朝から雨が止まず、雷も大きな音を立てて不気味に光っていました。２年前の大雨で、自宅が床下浸水したので、またあの時のようになるのではと、不安な気持ちでいっぱいでした。父が出張に行っていたので、母と私と弟と妹だけで、なおさら不安でした。母の携帯の災害警報が鳴るたび､怖くて怖くて仕方ありませんでした｡そしてついに、夜７時半ごろ、自宅を離れて避難することになりました。自宅近くの川が氾濫の危険があり、交流センターに行くことになりました。家を離れるときは、何事もなく、家の中がこのままの状態で戻ってこられますようにと、祈るような気持ちでいっぱいでした。

交流センターには、近所の人たちも避難していて、同じ境遇の人たちと一緒なので、少し落ち着きました。その日は避難所で寝ましたが、家のことやこれからのことが心配で、なかなか寝付けませんでした。

次の日の朝、起きてすぐ「もしかしたら水が引いているかもしれない。」と思い、母と私で見に行くことにしました。すると、途中の道が冠水していて、行き止まりになっていました。遠くから家の様子を見ると、田んぼも畑も水浸しになっていて、まるで海のようでした。その中に、海に浮かぶ島のように私の家が沈んでいました。「あぁ、床上まで上がっているな……」と母と二人で肩を落としました。でも一方で、やはり避難して良かった、命があって良かったと安心する気持ちもありました。

避難所に戻ってしばらくすると、父が帰ってきました。私たちのことが心配で、急いで帰ってきたそうです。遠目で家の様子を見た父が、

「あれは床上浸水行ってるな。」

と言いました。信じたくない現実でした。夢だといいと思いました。

次の日の夕方、水が引いたので、家族と家に戻ることになりました。玄関のドアを開けた瞬間、絶望しました。床と壁が泥まみれでした。変わり果てた姿

に、涙が出そうになりました。またこの家で元のような生活ができるのだろうかと、不安でたまりませんでした。

　でも、立ち止まっている暇はありません。私たち家族と泥水との闘いが始まりました。使えそうなものを２階に運んだり、泥まみれの床を何度も何度も拭いたりしました。二日目になると、疲れもたまってきて、作業がつらくなってきました。ずっと同じ作業のくり返しです。泥を何度拭き取っても、なかなか床がきれいになりません。でも、父と母が、汗を流してコツコツ作業を続けているのを見て、私も頑張ろうと思いました。大好きな部活動も休んで作業しました。

　この時初めて、部活動が普通にできることは当たり前ではないのだと気づきました。早くクラリネットが吹きたい、早くみんなに会いたいと心の底から思いました。

　ようやく作業が一段落したので、学校に行くことになりました。部活動のみんなは温かく迎えてくれて、

「手伝えることがあったら、いつでも言ってね。」

と声を掛けてくれました。その日の部活動は仲間との楽しい時間と楽器を吹くことの楽しさで、夢のような時間でした。

　部活動が終わって家に帰ると、私の親友が家にいて、床の泥を拭いていてくれました。近所の人も手伝ってくださったおかげで、思ったよりも早く避難所生活が終わり、我が家での生活を取り戻すことができました。

　先日、近くのホールで、町の敬老会の方たちに、演奏を披露する機会がありました。今まで私は、自分の技術を上げるため、自分がやっていて楽しいからと、自分のための演奏をしていました。しかし、今回は、地域の人に恩返しがしたいという気持ちで演奏しました。地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、笑顔で私たちの演奏を聞いてくれました。私たちの演奏が、地域の方々の心を明るくできていたらいいなと思います。「誰かのために」という目標ができたことで、私はますます部活動が楽しくなりました。私がもらった大きな温かさを、少しずつ返していきたい。その気持ちを大事にして、私はこれからもクラリネットの練習に励みます。